

ときめき人

Tokimeki bito



球児たちの熱い夏 白球を追う球場と 胸に響くアナウンス

【右】東和町・米谷2区

伊藤 陽菜

いとう・はるな 佐沼高2年

【左】中田町・南加賀野

佐々木 伶奈

ささき・れいな 佐沼高2年

Profile

中学時代、伊藤さんは吹奏楽部、佐々木さんは卓球部に所属。2016年、2人は高校入学と同時に念願だった野球部マネージャーに。部員をサポートしながら、試合では場内アナウンスを務める。

「常に緊張感を持ってしゃべりました。想定外のことが起きても、落ち着いて声を出すことを心掛けました」とほほ笑む伊藤さんと佐々木さん。2人は、第64回春季東北地区高等学校野球大会、同県大会で場内アナウンスを担当し、県高野連関係者だけではなく、「聞きやすい」など、来場者からも高い評価を得ている。

場内アナウンスは、試合でベンチ入りしないマネージャーが担当する。普段の会話と違い、アクセント、イントネーションや間の取り方など、技術が必要。練習試合などでもアナウンスし、言い間違いや早口になるなど、反省点は少なくなかった2人。「1人だったら、続けられませんでした」と佐々木さん。2人は、その日のうちに反省点を

振り返り、次の試合には修正をしていた。

2016年、2人は佐沼高野球部に入部し、憧れのマネージャーに。しかし、ノック時のボール渡し、道具の準備や整理、草取りなどの環境整備、多岐にわたるマネージャーの仕事に初めは戸惑いを隠せなかった。慣れない仕事も2人で考え、励まし合い、笑顔でこなしていった。昨年の夏大会ベスト8、秋のベスト16入りは、2人の陰での支えがなければなかったかもしれない。

「選手が勝つためのサポートをしていきたい」と伊藤さん。2人の目標は、選手を勝利に導くこと。目の前の出来事に一喜一憂せず、緊張感を持って部員を支えている。選手だけじゃない。野球に関わる人たち全ての熱い夏が今年も始まっている一。

編集後記

▼全国広報コンクールの表彰式に出席。全国の広報パーソンたちと再会し、広報談義を交わしてきた。みんな熱いハートの持ち主、話は尽きない。そこであらためて気付いた。「どれだけ時間がたっても大切なものは変わらない」。担当に戻った時の決意を忘れないでいたい。(及川)

▼今号の特集の中総体。各学校が優勝を目指して、必死に練習をしてきました。息子を持つ母としては、目標に向かって一生懸命にできる環境は顧問の先生はじめ、コーチや保護者の皆さんの支えがあるからこそ。子どもたちには感謝の気持ちを忘れないでほしいと思います。(千葉)

▼地域行事や部活動、普段の生活でも、いつも誰かが誰かを支えている。目には見えない、認められようとしてではない、縁の下の力持ちが必ずいる。広報紙も皆さんの支えがあつてこそ。いつでも大事なのは感謝を忘れないこと。いつか自分も支える側へ。(伊藤)



モバイルとめ

(携帯電話版ホームページ)

<http://www.city.tome.miyagi.jp/m/>



登米市メール配信サービス

(防犯や防災、イベント・市政に関する情報をメールでお届けします。)

<https://mail.cous.jp/tomecity/>

